

1930年代に発見される楠木的なもの

著者	森 正人
雑誌名	人文論叢 : 三重大学人文学部文化学科研究紀要
巻	26
ページ	147-159
発行年	2009-03-31
その他のタイトル	Creating and discovering things concerned with loyalist Kusunoki in the 1930s Japan
URL	http://hdl.handle.net/10076/10660

1930年代に発見される楠木的なもの

森 正 人

要約 本稿は1934年の建武中興六百年祭と35年の大楠公六百年祭が、資本や寺院や地方自治体の関わりによってどのように演出されたのかを考える。そしてそれを契機にして楠木正成に関わる事物や景観や人物などがどのように価値付けられたり発見されたりしたのかも紹介する。そうした過程は地域という地理的単位と結びついて展開した。それゆえ、地域なるものと国家なるものが関係的に立ち現れることが最後に示される。

1. はじめに

江戸時代末期の尊皇攘夷運動で忠臣として注目され顕彰の対象となった楠木正成は、湊川神社の創建、宮城二条橋前の銅像設置をとおして国家の偉人として可視化され、ひろく認められるようになった（森 2007）。1934年に楠木没後六〇〇年を迎え、1935年にそれを祈念するイベントが、楠木正成が命を落とした神戸市で楠公六百年祭として湊川神社と神戸市と神戸新聞社によって開催された（森 2008）。そこではローカルな実践や資本による実践が、国家的なアイデンティティ形成と結びついていったのである。

このように国家の自律的で均質な空間性という地理的幻想を楠木正成は保証してきた。ただし楠木正成は国家的偉人として語られるだけでなく、物質的な実在性をとおしてもその役割を果たしてきた。とりわけ、楠木正成にちなむ場所や風景や事物は、楠木正成の「日本的なるもの」への節合過程において生み出されたのみならず、そうした意味作用を可能にする物的基盤でもあった。ナショナルな地理的領域がローカルな地理的領域での実践によって立ち現れるように、風景や場所や事物といったやはり地理的事象が、国家的スケールでの楠木正成のイメージを演出していったのである。

ただし、楠木の景観も場所も事物も所与として実在するものではない。それらはある契機に楠木と結びつけられたり創られたりしたものである。湊川神社に明らかなように、楠木的な場所や景観の数々は作られてきた。そのように楠木正成をめぐる不安定に事物と価値が結びつけられ立ち現われている事象を、本稿では「楠木的なもの」とひとまず呼んでおく。この戦前の楠木的なものを考えるうえで、1934年の建武中興六百年祭と1935年の大楠公六百年祭が重要である。この2年に多くの楠木的な景観、場所、事物が創られたり発見されたりしたためである。

こうした楠木的なものの発見や創造の過程は、人びとの地理的スケールへの意識を刺激する。場所や景観の創出やそこでの催事は、地元や地域というスケールを刺激していき、それによって地域なるものが現れていく。このように地域を関係においてとらえる試みは、近年の英語圏の人文地理学の試みに共鳴している（アミン 2008 など）。それゆえ本稿は楠木的なものをめぐってどのように地域の感覚が刺激され、それがどのように国家的なスケールと関わるのかにも言及する。

本稿は、1920年代の楠木をめぐる動向、1934年の建武中興六百年祭と35年の大楠公六百年祭を概述したうえで、両年のイベントに向けてどのように楠木的な場所や景観や事物が創り出されたり発見されたりしたのかを考える。こうした創造や発見の過程は神社史や報告書では言及される性質のものではない。そこで、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、神戸新聞の記事を調べ、そこに記された出来事をまとめることとする。前両新聞紙は西日本で当時販売部数1位と2位を誇っており、神戸新聞は神戸市をカバーする地元であった。そこでの報道は単に事実を伝えるのみならず、記事をとおして人びとの楠木正成に対する感覚を作り出してもいたし、さらに大阪朝日新聞社は自らイベントを企画、実行しそれを記事で紹介していた。それゆえ、新聞記事を中心にして検討を加えることで、どのように楠木的な場所や景観や事物が発見されたり作られたりしたと伝えられたかということもとらえることができると考える。

2. 1920年代の楠公をめぐるうごき

1926年、松竹キネマは楠木正成を主人公にした映画「大楠公」を制作した。同じ時期に日活は「忠臣蔵」を制作している。これは、映画をとおして国家のアイデンティティを育成する「映画報国」を両社が打ち出したためであり、この趣旨に賛同した当時の文相が大楠公の題字を揮毫した。また、1922年に兵庫県伊丹町日蓮宗本泉寺境内の一隅で、檀家前田正敏によって発見された楠公父子及び一族の真墳墓も映画のシーンに取り入れられた。この墳墓の発見時には生い茂る草の中に埋もれていたが、古宝家が本物の墳墓であると鑑定したため、草は刈り取られ墳墓の周辺はきれいに整地されていたのである。

松竹キネマ社長自らが「映画報国」をうたったこの映画には、通常の映画制作の三倍もの予算が組まれた。予算の中で大きなウェイトを占めたのが鎧だった。すでに所蔵されていた四百番のほか数十番が新調され、鎧代が二万円に上ったという。多大な費用をかけて作成された大楠公は4月11日より浅草電気館で公開された。同年5月には、東京銀座の歌舞伎座で二代目市川左団次によっても史劇「楠木正成」が上演された。1920年代半ばに楠木正成にかかわる映画や演劇が制作・上演されており、こうして楠木正成は大衆化していったのである。

その一方で、日本の象徴である皇室との関係も密にとり続けていた。1925年に昭和天皇が即位すると、全国を臨幸して回った。1929年に神戸を訪れた際には、兵庫県庁を訪問した後、湊川神社を訪れている。また、1932年には高松宮殿下が海軍砲術学校の生徒とともに楠公史跡を訪れた。大阪府南河内郡天野山金剛寺に一泊し、翌日に後村上天皇松尾御陵に参拝の後、楠公首塚本堂などを訪れ、最後に千早城跡を経て金剛山頂に登って帰京している。

さらに宮内省は大日本楠公会の事業を協賛することを1930年10月に表明した。大日本楠公会は本部を楠木正成首塚の所在地である河内観心寺に置いて1927年に発足したもので、1930年の時点で会員は三万人に達していた。

そもそも、大日本楠公会の本部である観心寺の恩賜講堂は、1928年の昭和天皇即位礼に際して京都御苑に建てられた饗宴場建物が宮内省より大日本楠公会に下賜されたものである。この建築部材を建築家であり大阪府の史蹟名勝天然記念物調査委員でもあった池田谷久吉が設計し1930年5月25日に竣工した。この建物は国民教化と思想善導をめざす大日本楠公会の収容会館として機能した（河内長野市教育委員会2002）。

宮内省と大日本楠公会は共鳴しながら活動を行っていたのであり、宮内省はこの会が企画

する楠公六百年忌法要記念の『楠公伝』の出版に協賛の意を示した。当時の宮内省次官はこの出版によって、全国の人が楠公について深く知ることができるとの期待を表明している。また、文部次官は新聞紙上で国民精神の作興は国史の研究に負うところが多く、国史研究によって世界無比の日本の国体も明らかになるのだが、その国体を如実に体現したのが楠木であるため『楠公伝』の刊行は意義あるものだとする。彼は歴史を研究する行為によって、国民共通の普遍的な歴史が立ち現れ、それが日本人のアイデンティティ形成に寄与することを理解していたようである。この大日本楠公会は後述する1935年の大楠公の六百年祭に際して、記念事業として5月25日の祭日前後に軍人会館を会場として、六百年祭執行記念博覧会、講演会、団体での遺跡巡拝、武道大会を開催したほか楠木正成出生地とされる大阪府河内郡赤坂村に楠公歴史館を建設した。

このほかに、1920年代には教科書において南朝もまた皇室としての正統性を持つのだという南朝正閏論争が行われ、南朝の正当性が認められた。それにより学校教育においても楠木正成の功績が語られるようになった。このように、1920年代には学校教育、マスメディア、国家が三つどもえて、国家的偉人としての楠木正成像をつくりあげては流布させていたのである。

3. 1934年と35年のイベント

(1) 建武中興六百年祭

「建武」という元号が1334年に開始されてから六百年後の1934年3月13日は「建武中興六百年記念の日」とされ、楠公に関わりのある場所で式典が開催された。大阪市では三越百貨店で大日本楠公会が展覧会を主催し、大阪市は大阪城天守閣で記念展を開催した。四条畷神社や桜井の駅址のほか吉野朝四帝関係の神社、寺院、勤王士を祀る寺院等では一斉に祭典が行われ、最寄りの小学児童の参列が求められた。

また、大阪市の中央公会堂では林弥三吉陸軍中将与中村直勝京都帝国大学助教授によって建武中興の講演会が行われた。千早村、赤坂村、四条畷、天野山など楠公に関わる場所でも同じく記念講習会が行われた。さらに、この日、府下の中等学校では建武中興に関する訓話をして非常時の第二国民に輝かしき「皇国の歴史」を再認識させようとした（大阪朝日新聞1934年1月12日）。

新しく史跡指定された河南の楠公関連の史跡巡りなども行われた。史跡巡拝の起点となる大阪電鉄富田林駅から石川橋詰にかけての沿道には緑色のアーチがかけられ、また町内には菊水旗が掲げられたし、千早村には造り物の武者人形が登場した。

これら記念式典や講演会は大阪府当局によって具体化された。その一方、たとえば大阪朝日新聞社は自主的に建武中興の記念日に飛行機を飛ばして、金剛寺、観心寺、赤坂村長、千早村長あてにメッセージを投下するなどしてこれらの祭典を祝したと報じた。また、1934年3月7日から4日間、大阪女子専門学校教授の魚澄惣五郎による「建武中興の回顧」の論説を掲載するなどして、読者の建武中興六百年祭への関心を刺激した。つまり、国家的アイデンティティの育成は、行政的に下位に属する地方の行政当局によるさまざまな企画とともに、新聞社による報道をとおしてなされたといえよう。

(2) 大楠公六百年祭

ただし、1934年の建武中興六百年祭よりも翌35年の大楠公六百年祭の方がはるかに規模の大きな出来事であった。楠木正成は建武の新政に貢献し、後醍醐天皇のために命を賭した人物として注目されるようになったのだが、彼の死を悼む大楠公六百年祭の方が建武中興六百年祭よりも盛大であったという事実は、新政の開始という政治的な変化よりも楠木個人の方に国家や地方自治体が重きを置いたということであり、また人びとの関心を刺激したということであろう。

大楠公六百年祭の法要は、天野山金剛寺では4月18日より26日までの八日間、観心寺では5月22日から28日までの六日間、湊川神社では5月25日から28日までの3日間で執り行われた。旧暦5月25日は楠木正成の命日であり、彼が最期を遂げた場所に建つ湊川神社では5月25日より法要が営まれたと考えられる。神戸市は湊川神社での六百年祭にあわせて、4月11日から5月30日までの50日間、神戸観光博覧会を開催した。

5月25日には、観心寺で「庭儀大楠公六百年正当御遠忌大法要」が、建水分神社、金剛山上葛木神社、天野山金剛寺でも大祭と大法要が営まれた。また大楠公六百年に合わせたかのように、5月18日には千早城址である千早神社が一躍村社から府社に昇格した。1922年より、楠公顕彰会の手で十万余円を投じて改築された社殿の遷座祭が1935年5月24日に行われ、翌25日に大楠公六百年大祭が執行された。さらに大大日本楠公会は大阪市中央公会堂で大楠公六百年祭祭典を盛大に執行した。これら5月25日に各地で行われた記念式典に併せて、楠木一族に由縁のある場所にある郵便局（神戸中央局、観心寺のある大阪府長野局、千早城址のある大阪府神川局と小吹局など）では記念スタンプが使用された。

(3) その他のイベント

ここでは、上記のイベントと関わりながら行われたイベントを紹介する。

1935年の神戸湊川神社での大法要を企画・運営した大祭奉賛会は、5月1日に全国の忠孝節義者表彰式を行った。これは全国を東北、関東、北陸、東海、東山、近畿、中国、四国、九州、沖縄の十区に分けて、各区で孝子の部、節婦の部、義奴婢の部、義士の部、忠臣の部にあてはまる人物をそれぞれ選んで表彰するものであった。選ばれたのは40名であり、代表として表彰されたのは孝子部で選出された兵庫県に住む女性で、他県に住む人々には各府県庁宛に発送された。これらの人びとは「非常時日本を背負う中堅国民としての熱情にたぎる人々」（神戸新聞1935年5月1日）だとされた。すなわち、この表彰式をとおして非常時の日本を支える忠誠の意識を普通の国民も持つことが求められたのである。

このような国民は自律的に育つわけではない。そのため、5月23日と24日に神戸市で開催される第十二回全国小学校教員会総会のプログラムの一つに全国小学校教員精神作興大会が加えられた。午前湊川神社参殿前に集合した各都市小学校教員会代表六百数十名は、山手小学校講堂に移動し、日本精神涵養方法に関する文部省諮問案に対する答申案、楠公精神顕現振作案などを満場一致で可決した。またここで安東海軍中將、三上文博士が楠公に因む講演を行った。

ちなみに神戸市はすでに、全市の小学校教員約二千三百名（男性千七百名、女性六百二十名）を対象に、5月5日に湊川神社社殿前で小学校教員精神作興大会を独自に行っていた。性別と所属する学校の地区によって教職員は楠校、橘校、湊川校に午前六時に集合し、そこから湊川

神社へ行進し、午前六時五十分に参集して式典が開始された。男性教員はモーニング姿、女性教員は紋付き袴の礼装で、「非常時を正しく導く教員精神を宣揚」（神戸新聞 1935年5月6日）したのであった。

教職員が学校で児童や生徒を正しく育成する役割を果たしていたのに対して、地域でそうした役割を担っていたのが青年団であった。そこで5月22日から25日にかけて、神戸市で大日本連合青年団主催第十一回全国青年大会が開催された。これに集まったのは各地から選抜された代表五百名で、宿所は市内の七生館、楠寺、安養寺が充てられたが、必ず一夜は楠公の忠節を追慕するために七生館に宿泊させられた。なお、大会では懇談会、授賞式、会議、交歓会、楠公を偲ぶ夕、体験発表、講演会（講師は林彌三吉と中村直勝）のほか、楠公史跡見学と臨地講演、神戸港見学などが七生館、学校、商工会議所などで行われた。

このように、大楠公六百年祭に合わせて、神戸市では楠木正成のような忠誠心あふれる国民を育成する教職員や青年団の全国大会が開催されたのである。健全な国民は健全な身体を持たねばならなかった。そのため1935年には健康な身体を可視化して称揚するさまざまな取り組みも見られた。

たとえば、神戸湊川神社の大楠公六百年祭奉賛会は、六百年祭に向けた催事の一つとして奉納武道大会を七生館で5月2日より行った。初日は柔道、二日目は剣道、三日目は弓道の順であり、植民地支配していた朝鮮や台湾からの参加者も含む総勢五百五十名、二十二歳から八十四歳までが参加した。

小学児童による学校の奉納体育大会も5月24日に神戸市民運動場で行われ、男女合計九千三百名の児童と生徒マスゲームや体操を奉納し、また5月27日は附属対抗中学校楠公史蹟駅伝競走も行われた。

神戸市以外でも同様のイベントが行われていた。1935年4月28日、大阪朝日新聞社が大楠公六百年祭記念体操大会を甲子園球場で開催した。これには全国から十団体、合計一万二千人が参加して、健康で丈夫な国民の身体的重要性を見せつける行事だった。

当日、大阪朝日新聞社が所有するC-5型（新野飛行士操縦）とオートジャイロ（飯沼飛行士操縦）の二つの飛行機が低空飛行を行うと、赤白の鉢巻に白い体操服に身をつつんだ大阪市小学女児三千名、その他の参加団体の代表者六十名ずつ、役員らが入場し終えた午後零時半、開会式が始まった。君が代の演奏と日の丸の旗が掲揚され、式辞が述べられると大会が始まった。

ここで演じられた体操を、全体の統一性を強調するマスゲーム、鍛えられた肉体の美しさを示す器械体操、普通の人びとによる体操の3つに分類することができる。最初のものには、大阪市小学女児三千名による「行進遊戯」、神戸市小学校男児三千名によるマスゲーム、大阪府、兵庫県男子中等学校生徒三千名によるマスゲーム、東京女子体操音楽学校生徒と兵庫県、大阪府下の女子中学校生徒二千百名によるダンスなどがある。ここでは小さな児童や生徒によって一糸乱れる隊列や運動が演じられることにより、子どものときからの全体性への同調精神の必要性が示される。「一糸乱れぬ統制のもとに動く諧調の壮麗さ」（大阪朝日新聞 1935年4月29日）が重要なのである。二つ目のものとして、体操学校の生徒四十名によるマット運動、全日本体操連盟選出のオリンピック候補二十選手による器械体操が挙げられる。ここでは、「躍動する肉体の均整美」（大阪朝日新聞社 1935年4月29日）が提示される。最後の例としては、色とりどりの体操着に身をつつんだ老若男女で構成される大阪市十三ラヂオ体操団によるラジ

オ体操であり、これは「巷の人々の手で立派に生かし堂々たる統制美を誇」るものである。つまり、児童や体操選手など若く健康な身体を持ち合わせていない市井の人も、日々の簡単な努力により健康で統制された身体が獲得できることが示されたのである。

以上、1934年と35年に行われた楠木正成にちなむ様々な行事を紹介した。これらの出来事は一定期間、ある場所において行われることにより、楠木正成に対する人びとの認識を作りあげたり方向付けたりした。これらは、本節の最後の例を除いては、神社や地方自治体が主たるエージェントとなり行ったものであった。そこで次章では、民間の企業の役割を考えてみたい。

4. 大阪朝日新聞社と大阪電鉄

(1) 楠公の賞賛と知識人たち

本節では大阪朝日新聞社をとりあげ、1934年と35年の両年にそれがどのような活動を行ったのか大楠公展覧会を含めて概述する。

大阪朝日新聞社は1934年の建武中興六百年祭に際してはそれに関する論説を掲載し、また先に述べたように1935年4月には体育大会を主催した。このほか、1935年に大阪朝日会館で大楠公展覧会（4月4～18日）、京都、大阪、神戸の三ヶ所で大楠公講演会（3月7～9日）、楠木のゆかりの地が大阪府内に存在することを利用した史跡臨地講演、さらに記念体育大会やページェント、劇、映画などを行った。また夕刊では東京朝日新聞で1935年4月5日より、大阪朝日新聞で4月9日より、大佛次郎作、荒井寛方画の小説「大楠公」が掲載され始めた。

大楠公六百年祭記念事業について、1935年1月12日、大阪朝日新聞社はそのための協議会を開催している。そして会終了後に「大楠公を語る座談会」を行い、その様子は翌日13日の紙上で公開された。協議会のメンバーは、掲載された順に黒板勝美（東京帝国大教授）、白岩秀夫（湊川神社禰宜）、宇多川昇（四条畷神社宮司）、中村直勝（京大助教授）、魚澄惣五郎（大阪府立女専教授）、大北樟雄（大阪府社寺兵事課局）永島眞龍（河内観心寺住職）、曾我部俊雄（金剛寺住職）、江崎政忠（大阪史蹟調査委員会）、岡山広次（建水分神社社司）、大谷澄（大日本楠公史蹟八勝会）、五十嵐夏次郎（神戸史談会）、葛城貢（金剛山葛木神社社司）、加藤鎮之助（楠妣庵）で、このほかに9名の朝日新聞関係者も含まれた。

メンバーの顔ぶれをみると、湊川神社や四条畷神社など楠木正成に由縁ある寺社関係者が多いこと、しかもそれぞれの寺社の序列に基づいて順番に紹介されていることがわかる。そのほかに、大学関係者や調査委員会関係者や郷土史研究者などの学術研究者たちも名前をつらねている。ここに名前のある黒板勝美、中村直勝、魚住惣五郎は、1935年3月7、8、9日の三日間に、それぞれ大阪、神戸、京都で大阪朝日新聞社によって開催された「大楠公講演会」で講師を務めている（三氏のほかに、授西田直二郎（京都大教）、林彌三吉（元第四師団長）、平泉澄（東京帝大助教授））。

東京帝国大学教授の黒板勝美は、1934年に同じく大阪朝日新聞社が開催した弘法大師文化展覧会に際しての講演会でも講師を務めた。このとき黒板は、日本文化が中国からの影響を受けながら成立したことを認めた上で、外国文化を巧妙に取り入れる日本の「技芸」を賞賛し、中国から密教を取り入れ、またいろは歌を作成したとされる弘法大師はそうした日本文化の具現者だと褒め称えた。

楠木正成に関してはどのようなレトリックを用いたのだろうか。くだんの座談会において黒

板は、楠木正成が建武の中興に果たした役割を高く評価し、楠木の戦死した旧暦の五月二十五日を全国的な大楠公記念日として統一すべきだと言っている。楠木正成は天皇と国家に忠誠を勤しむ日本武士道をもっとも具現化した人物だと黒板が見なしているからであった。

黒板の楠木正成観は神戸での公演においてもさらに展開された。黒板は（おそらく太平記を参照しながら）、後醍醐天皇が楠木の功績を讃えたとき、自分の功績を誇ることがなかったことを例に挙げ、「自分の命を投げ出して働いて、それに対して少しも功を誇らない」この行為をみならい「吾々は皇室に忠なる臣民であり得るといふことを信ずるのであります。大楠公はつまり天皇陛下の御為に、皇室の御為に、自分の一身を断ち、一家を捨て、一族を滅ぼして差支えない、それに対し少しも求むるところがない」として、現今の日本国民にも楠木のような天皇への忠誠を求めたのである。

ただし、黒板は1934年の弘法大師文化展覧会では中心的な役割を担ったが、35年の大楠公展覧会では講演会以外はあまり大きな役割を果たしていない。むしろ大阪女子専門学校教授の魚澄惣五郎が、ここでは実質的な役割を担った。

魚澄は1934年3月7日から10日までの四日間にわたって「建武中興の回顧」と題した文章を寄せた。この中で彼は、後鳥羽上皇による朝廷の権力奪回の試みを国体の本質とした上で、それ以降、王朝政治回復の意識が国民思潮の底流となっていたとする。そして、建武の中興はそのような国民思想が顕現する契機だったと指摘している。また、先に述べた座談会では「大楠公の偉大なる点はむしろ朱子学を日本的に取入れた点にある」（大阪朝日新聞1934年1月13日）と、密教を日本流にアレンジして取り入れたた弘法大師、仏教を日本流にアレンジして取り入れた聖徳太子という語りのスタイルと同様、楠木正成は朱子学を日本流にアレンジした人物としても紹介される。すなわち、楠木であれ弘法大師であれ聖徳太子であれ、それぞれの人物が取り上げられるのは彼らを規定する日本的なるものを称揚するためであると言えるだろう。

このような楠木に対する観念を事物の配置をとおして提示したのが大楠公展覧会であった。それによって「日本精神の作興に貢献」することが目指された。

展覧会の構想は1935年1月13日に紙上で発表され、以降、文部省宗教局国宝調査室、甲冑鑑定の権威や、黒板勝美、西田直勝、魚澄惣五郎などが展示品の選別や陳列に関して指導を行なった。開会直前の4月2日には文部省宗教局国宝保存係と魚澄が陳列を指導し、翌3日には黒板が「最後の監査」を行なった。なお、入場券は大人が五十銭、学生や団体客は二十銭である。

この展示会の詳しい模様は明らかでない。しかし、新聞記事によると、参観者は「何れも尽忠無比の聖将の遺業を偲びつゝ一筆、一品に眼も心も奪はれ、俄に会場を去りやらず釘づけ」だったと紹介している（大阪朝日新聞1935年4月10日）。抽象的な説明よりも、楠木と関連づけられたさまざまな具体的な事物を見学する方が、楠木の功績、なにかんづく国家への忠誠の重要性は理解されやすい。

この大楠公展は重要な教育の装置でもあった。実際、魚澄は展示会の最終日に大阪女子専門学校の生徒十数名を引き連れて参観を行なった。また、魚澄はこの展覧会期間中の16日に大阪府下の歴史教諭七十名あまりを会場に集め、各陳列品を詳細に説明する講演を行っている。講演会は閉会の2日前に開かれたので、教員が自らの生徒や児童を連れて展覧会を訪れて説明するという事は難しかったであろうが、この場で説明を受けた教員は、それぞれの教育にお

いて楠木の功績を事物の紹介をとおしても説明することになる。しかもその説明内容は、魚澄の講演をとおして画一化されていったのである。

（2）史跡巡拝と大阪電鉄

展示会のような一つの空間に事物を集めて開示するだけでなく、楠木の場合には大阪府河内郡周辺に点在する楠公史跡を実際にめぐることにも可能であった。実際にそれぞれの地に足を運ぶことは、「公の生ひ立ちの地、公を育くんだ山川、公の勉学の跡何が偉大なる公を生んだか、一意誠忠東国の大群を敵にして孤軍奮闘した跡、一族の血を流し肉を削つた歴史のあとを観て追慕の念を強からしめることの有意義をしみじみと感ずる」ことができるのである（大阪朝日新聞 1935年4月27日）。

これらの場所は決して大阪南部においてのみ価値を持っていたのではない。大楠公六百年祭が行われていた1935年5月22日、ラジオ放送でこれらの場所は日本各地と結ばれた。「大楠公史蹟巡り」と題されたこの日のラジオ番組では、大阪府南河内郡赤坂村永分にある楠公誕生地を最初に取り上げた。講師は魚澄惣五郎で「大楠公誕生地に立ちて往事を偲ぶ」と題して講演したのだった。

もちろん、単に楠木正成を知るための史跡としてこれらが見なされたわけではなかった。大阪毎日新聞 1935年4月13日付は「偉業を偲ぶ楠公遺蹟地巡り 素晴らしいハイキング・コース」として観心寺、楠枇庵、河合寺、後村上天皇御陵、寄手塚身方塚、下赤坂城址、上赤坂城址、楠公生誕地、建水分神社、千早城址、金剛山、天野山金剛寺、吉野山という場所がハイキングで訪れるにも適していると紹介した。健康な身体をつくる健全な娯楽として注目されていたハイキングは、人びとに余暇の感覚を与えながら楠木についての関心も高めるために重要な役割を果たした。

個人だけでなく、グループでのハイキングも行われた。大阪市市教育部門大阪遠足連盟による1935年5月の第5回市民遠足デー（5月12、18、19の3日）では、笠木山、桜井の駅、湊川神社、四条畷、赤坂付近、長野と金剛山など（そのほか9コース）楠木正成に関連する場所が選ばれた。また、大阪府連合青年団は府下の全青年団員中から100名の模範青年を選抜し、5月10日から12日までの三日間、大鉄瀧谷不動竜泉寺から楠枇庵、千早城、葛木神社など楠公史蹟を巡歴し、現地で魚澄惣五郎など六講師により遺徳追慕、精神修養の講習会を開催している。さらに、大阪市連合青年団も同月12日と26日に、これらの史蹟をハイキングとして訪れた。

この楠公史蹟周遊で活躍したのが大阪電鉄である。大阪電鉄は図1のような遺蹟巡拝のリーフレットを制作し、人びとに自社の鉄道を用いた遺蹟巡りを推奨した。葉の裏面には起点となる阿部野橋駅から大阪府南部に伸びる鉄道沿線上に散在する史蹟を描いた略図が示されていた。

大阪電鉄は阿倍野橋駅から乗車可能な楠公遺蹟廻遊券を八十銭で発売した。また富田林駅からの十二人乗りの廻遊貸切自動車も十八円で用意した。そのほかにも金剛・葛城登山廻遊券が



図1 大阪電鉄発行の大楠公六百年祭の葉

八五銭、夏季のみ発売された金剛登山宿泊券付乗車券が二円二十銭、バスによって連絡される大天野山金剛寺往復券が一円四十銭、同じくバスが連絡する観心寺往復券が一円三十銭で販売された。

1935年4月21日の大阪朝日新聞には、「大楠公六百年祭 大楠公史蹟巡りは大鉄電車に乗って」として、大阪電鉄を用いるとどのような史蹟をめぐることができるか紹介する広告記事が掲載された。そこでは楠木を輩出した場所をめぐり、楠木を追慕することは、非常時多難なかで日本精神作興のために重要なのだとされている。

まず紹介されるのは沿線の名跡である。藤井寺からはじまり、上赤阪城址、下赤阪城址、建水分神社、観心寺、千早城址、金剛寺が紹介され、また吉野山の諸名跡も紹介される。記事の右下に掲載された路線図は二手に古市駅から二手に分かれ、一つは吉野神宮、もう一つは金剛寺や観心寺の最寄り駅となる長野駅まで至る。しかも起点となる大長野町、富田林町が概説されその地が決してへんびな場所ではなく「発展」していることが強調されている。

実際にどれほどの人がこの史蹟を訪れたのかは明らかではないが、新聞によると、史蹟めぐりの起点となる長野町には大阪電鉄や南海電車の車輛から降車する男女中学生、小学生は毎日六千人以上だったという。これに国防婦人会、軍人会、青年団、会社、工場、講などの団体旅行者を合せると二万人に上り、観心寺や金剛寺へと続く道路はこの群集のために自動車も通れないほどであったと描写される（大阪朝日新聞 1935年5月12日）。

5. 楠公的なものの発見

(1) 発見される事物

先の大阪朝日新聞社での座談会で、魚澄は「また遺憾なのはこれだけ全国民の讃仰を受けてゐる人でありながら大楠公の権威ある肖像画がないことである、宮城前銅像や軍艦「河内」艦内にはそれぞれ肖像があるが果していかなる資料によつて作成したか明らかでない、この際は是非とも純正確実なる肖像画を得たいものだと思ふ」（大阪朝日新聞 1934年1月13日）と語っている。これは重要な点である。そもそも中世の人物であり、しかも朝敵とながく見なされていた楠木正成に関わる事物は、明治時代においても存在しなかった。楠木の面貌を描いた絵画が存在しなかったがゆえに、宮城前の銅像建設において楠木の面貌作成に腐心したのだった（森 2007）。したがって、楠木を讃える 1934年と 35年に向けて、楠木に関わる事物を発見し収集し、価値づける必要があったのである。また、楠木にゆかりのある場所も、歴史的にも文化的にも価値あるもので、訪れるに足るものとする必要があった。

大阪朝日新聞社は「あらゆる埋もれた大楠公関係の名宝はこの機会に広く一般に紹介したい意図のもとに大江計画部長らが手分けして各地を探」（大阪朝日新聞 1935年3月30日）した。その結果、1935年、建武中興の合戦屏風が奈良県郡山辺郡朝和村の旧家で発見された。おそらく慶長期、山樂前後の作品と考えられるこの屏風の左端には千早の砦や岩石を投ずる僧などが描かれ、また第二面からは天王寺合戦や、乗り物に乗った後醍醐天皇が、文官らしき数人や武将などを伴い船上山に御幸する様子が描かれ、さらに、神戸の生田の森での激戦に身を投じる楠木軍なども描かれていると紹介された。

この他にも、1934年から35年にかけての新聞紙上には多くの事物の発見を伝える記事が見られるのだが、それらの多くは何らかのイベントや展示会に際して発見されたものであった。

たとえば大阪市が主催した建武中興六百年祭記念展には建武中興にちなむ書画が集められ、そこに搬入された京都市のある人物が所有する手紙が、大阪女子専門学校教授の魚澄惣五郎により後醍醐天皇の宸翰と鑑定された。この手紙は記念展に持ち込まれることによって、楠木に関わる事物となりえたのである。

また、事物の発見のほかに、それまでほとんど公開されなかった事物がこれを機に広く人びとに開陳されもした。たとえば、600年間、秘仏として一切開扉されなかった歙心寺が所有する国宝、不動明王が大楠公展覧会で特別に開陳されている。この不動明王は世界平和の建設の象徴と説明され、平和と慈悲を目標とする楠木正成が不動明王に帰依していたと両者は強引に重ね合わされたのである。

イベントに直接関係がないような発見も記事で紹介された。豊能郡池田町の寿命寺からは楠木正成が寄付した兜、菊水の紋を持つ奉納旗、感状が発見された。これらは「斯界の権威」によって本物であると鑑定された。こうした例は、楠木ちなむイベントやその報道が、人びとをして自らの所有物が楠木に関わるものではないかと思わせ、それによって事物が発見されたのだと考えられるし、そうした一般家庭での事物の発見はさらに人びとの楠木正成への関心を高めていった。さらに言えば、一般家庭での発見に関する一連の報道は、日常生活の中で楠木的なもの存在を意識させたのであり、楠木的なものへの親近感をも醸成させたと考えられる。以下は新聞記事から拾ったいくつかの例である。

1935年3月23日、大阪朝日新聞と大阪毎日新聞両紙は、河内郡長野町の旧家から楠木正成の三男楠木正儀より長男正行（まさつら）の四条畷での戦死を知らせるために送られた書状が発見されたことを伝えている。この旧家和田家は楠木氏の一族である和田氏の後裔で、その家の土蔵から古びた掛け軸が発見されたので、富田林中学の教諭が調べた。それによると、この書状は1348年の四条畷での戦いで正行が自害した翌日に送られたものであるらしいことが分かってきた。そこで、和田氏はこれを大阪府社寺兵事課に持参して鑑定を求めたところ「だいたい間違ひないと」（大阪朝日新聞1935年3月24日）と認められたという。

大阪毎日新聞の記事にしたがってその内容をまとめると、次のとおりである。昨日、正月五日の四条畷の合戦で官軍が意外にも大敗し、正行兄弟も戦没した。このことは同族一同驚愕している。四条畷で敗戦し、正行が戦死したため、善後策を講じるため興良親王から御書、北畠親房卿より書状も賜ったので、急いで観心寺の行宮を参宮してどのようにすれば伺ってきたい。もし神様が官軍のため尽力してもらえらば、賊軍を滅ぼし、私は父兄の仇をうって無念を晴らすことができるだろう。

大阪朝日新聞は、社寺兵事課はこの書状が本物であろうと判断したが、念のため金剛寺に保管されてあった正儀の書と比較して結論を出す予定だとしている。ただし、その結果を知らせる記事は、大阪朝日新聞にも大阪毎日新聞にもその後見られない。

また1935年4月10日の大阪朝日新聞が伝えるところによると、大楠公の夫人久子が信奉し、彼女が人生の最後を過ごしたとされる楠妣庵観音堂の本尊でもあった木彫十一面観世音像が、大楠公六百年祭を機に所有者の松尾豊氏から観心寺に寄贈された。記事によると、この観世音像を守本尊とする楠妣庵は明治初年に廃寺となり、無住のまま荒廃するにまかせていたため、環俗していた松尾氏から1884年にこの十一面観世音像は散逸を防ぐために観心寺に預けられた。その際に預け入れ証文が作成されたのだが、その証文は金銭貸借上の抵当となり、他人の手に渡りかける事件が起こった。このとき、松尾家は親戚会を開き、「個人の所有とするにはあま

りにも尊くまた惜しい」とのことから寄贈を申し入れたのである。

本来ならこれは楠妣庵に返還されるべきなのだが、1915年に復興された楠妣庵は妙法寺派で像を返還するには不相当と考えられ、それまでその観世音像を本堂内に安置していた観心寺が一番妥当だと提案が満場一致で可決された。それゆえ、松尾家は1935年4月28日に奉納式と法要を観心寺で行い、その後に大阪府東條村大字甘南にあった楠公夫人の生家南江家の墓も詣でている。

(2) 作られる景観

先に大阪南部の史蹟巡りがハイキングとしてとらえられ、多くの人を呼び込んだことを説明した。興味深いことに、千早赤阪村周辺の五つの寺院や城址は建武中興六百年に際して新たに史跡に指定された。それまで地元以外の人びとからはあまり顧みられることがなかった寺院は、これにより史跡としての価値を獲得したのである。史跡指定により荒廃していた施設には適度な補修が加えられていく。

また、1934年から35年にかけては、楠木正成にちなむ石碑なども作られた。1934年4月に大阪市の天神橋が三年あまりの歳月と百五万円の予算を投じて作り直されると、それにあわせて中之島近辺が楠正行の渡邊合戦の古戦場であることから、中ノ島の剣先に史蹟碑を建設し、さらに楠の大樹を植樹することを大阪市教育部が計画した。

楠木正成と息子の正行が最期の別れを行なった桜井駅址には、1896年に撮影された図2のように、松の木とそれを取り囲む柵だけが残されていた。その後、この地にはいくつかの石碑が著名人により建てられた。1935年3月には両者の別れのシーンを表した石像を建てること決定された。発起したのは桜井駅址がある三島郡の小学校長楠公顕彰会で、この石像をとおして「大楠公父子の尽忠を仰慕すること」（大阪朝日新聞3月20日）をもくろんだ。石像設立の基金は三島郡の小学児童約二万が年額十銭ずつ積み立てたものと、教職員月俸の百分の一、さらに強制ではないが郡内中等学校生徒の希望者からも集められた。

石像の制作は三島郡の茨木町内に居住するある人物が担当し、同年5月15日に完成した。この日は、楠木親子がまさに桜井の駅で今生の別れをした日に合わされたようである。そしてこの翌日の16日、大阪府三島郡各種団体連合会ならびに桜井楠公会は、桜井駅址で大楠公六百年記念祭を挙行了したのである。

会場には郡内の学童代表をはじめ青年団、青訓生、婦人会、処女会員など約二千名が参列した。そして、記念祭終了後の午後1時から島本小学校では林弥三吉中將が楠公精神顕彰の講演が行なわれた。この日、同郡内小学校では授与された菊水旗が国旗掲揚台にかかげ楠公精神を偲んだという。現在石碑は残っておらず、代わりに新しく設置された別れの情景を表す石像がある。石像が現存しない理由は分からないが、おそらく第二次世界大戦後に撤去されたと思われる。

さらに、同年5月13日には大和吉野山で六百年記念碑の竣工式が行われ、記念碑会長有馬良橋大將、宮西副会長、吉野神宮

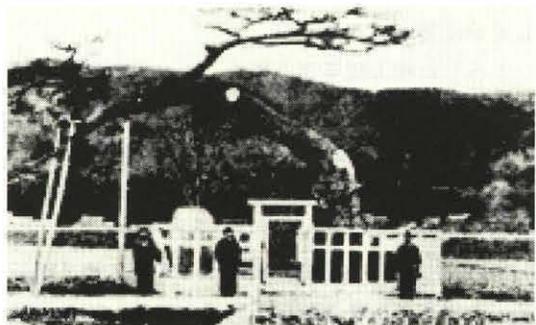


図2 絵はがきにあらわれた1896年の桜井駅址

大橋宮司のほか、小学児童や一般参拝者合計数千人が押し寄せたとされる。千早赤阪村では徳島県の画家で楠公崇拜者の森下白石が発起人となり、全国の小、中、青年学校の児童、生徒、教師などから10余万円の寄附を集め、奉獻塔の建設を1935年10月より開始した。塔の高さは楠木正成が43歳で自害したことから、43尺（約13m）にされ、1939年に完成した。

（3）発見される地域の忠臣

楠木父子だけでなく、楠木の功績に寄与した当時の武士たちの何人かは、この時期に楠木と同じような「忠臣」として見出され、顕彰された。このような忠臣は1935年の大楠公六百年祭において、楠木の家臣や関係者として見出されていったようである。

たとえば、楠木が赤阪で挙兵したときにそれを支援し、落命した南河内郡白木村平岩城主平岩左衛門尉茂直とその部下の忠誠心を讃えるとして、南河内郡にある高貴寺で1935年4月26日に慰霊法要が営まれた。法要後には平岩氏の居城であった平岩城に関する講演や現存する平岩家の家宝も展示された。

また、同年5月には大阪府泉北郡和泉町にある尽塚で、楠公や北畠頼家卿に従い忠死した千余名の英霊を慰めるために、尽忠祭が執行された。大阪朝日新聞1935年5月25日の記事によると、そもそもこの塚は泉寺に死者を祀るために作られたものだが、江戸時代の明暦年間に泉寺が廃寺になり、塚は同町の土橋の一部に利用されていたという。1931年、泉寺跡地を調査のために訪れたある調査員がこの塚石を発見し、泉寺跡地にこれを移動させ再度祀った。以後、この尽塚は和泉市にある泉井上神社の宮司と氏子によって管理され、毎年祭典を行っていた。そして、1935年の楠公六百年祭に当たり、この塚の前にさらに新たに「尽忠之碑」が建立され、盛大な尽忠祭が行われた。

さらに同年6月には南朝の側に立った「忠臣」を偲ぶために設立された「大阪ゆかり会」が大阪市住吉区にある阿倍野神社外苑に仮設の祭壇を設置し、北畠顕家をはじめとする南朝の武士の霊を慰めるための慰霊祭を挙行した。これに参加したのが、忠臣の一人安藤之信の子孫と、阿倍野神社が所在する阿倍野青年団の団員であった。

このほか、大阪朝日新聞1935年5月26日によると、1935年5月には楠木正成の御師とされる瀧覚坊という僧侶に関する研究成果が、南河内郡上村の研究家によって『瀧覚坊と大楠公』という小冊子にまとめられ、日本楠公会から発刊された。この小冊子がどのようなものかは現在確認できない。しかし記事に従えば、楠木正成にこの僧侶は多大な影響を与えた人物であるにもかかわらず、それまでほとんど知られることがなかったので、それを遺憾に思った人物がまとめたという。1935年に観心寺で行われた大楠公六百年祭大法要では、その六日目の27日に追悼法要を営んだ。

こうした楠木関係者の発見、そして前節の景観の創造という一連の出来事から興味深いことの一つは、小学生の教育的契機となっていることである。石碑建立資金の拠出は小学生からの半強制的な寄付行為によっているし、記念式典には「地元」の小学生や中学生が動員されている。小学生の楠木的な出来事への献身は、楠木のような国民を育成するために重要だったのである。

もう一つは、一連の出来事が「地域」や「地元」という地理的単位と関わっていることである。たとえば、桜井駅の石碑建立に際しては三島郡という行政単位が石碑建立の資金拠出の範囲として設定されていた。同様のことは1935年に神戸市に設置された楠木正成の銅像におい

でもみられ、このときは兵庫県という行政単位が重要であった。また、楠木正成に関わる人びとの慰霊祭の催行などでは、神社の氏子や青年団といった特定の地理的範囲と結びついた団体が中心的な役割を果たしている。個人的な家系に拠らない忠臣の慰霊は、地域を単位として行われた。特定の神社の氏子は「菊水の流れを汲む氏子たち」（大阪朝日新聞 1935年5月25日）と紹介され、人びとの地元への帰属意識と同時に楠木正成への連帯感を醸成していた。それによって強化される地域への愛着は、国家の忠臣という次元で国家的スケールと結びつけられる。だからこそ、地元の小学生や青年団は重要な担い手だった。実際、ハイキングの節で述べたように、複数の地理的スケールでの青年団は、しばしば楠木にちなむ場所を訪れる巡拝の重要な単位として機能していた。「菊水の流れを汲む」という言葉は、楠木と人びととの時間的つながりを明示しており、楠木的なものは時間的かつ空間的な同質性の感情をつくりあげたのである。

6. おわりに

本稿は楠木正成にかかわるイベントが行われた1934年と35年において、地方自治体、神社、マスメディア、鉄道会社がどのような取り組みをしたのか、またその際にどのように地域的な単位が自覚され、地域的なもののイメージが強化されたのかを考えた。

1934年の建武中興六百年祭では、観心寺や金剛寺などで記念式典が開催され、また大阪市などでは講演会が催された。しかし1935年の大楠公六百年祭はそれをはるかに超えるスケールで展開された。寺社での大法要のほか、大阪朝日新聞による展覧会、ラジオによる臨地講演、大阪電鉄によるハイキングの強調のほか、体育や武道の大会、教師の啓蒙活動、青年団の全国大会、忠孝のモデルとなる国民の選抜が行われた。

そしてその大楠公六百年祭に際しては、楠木に関わる事物や人物が発見され、景観が作られた。これらは行政やマスメディアだけでなく、地元の小学生や青年団や氏子の貢献にも拠った。こうして地元への意識が刺激され、それはやがて国家への意識へと節合されるのである。それゆえ、地域という地理的スケールは自明のものではなく、さまざまな出来事をおしてそれへの感覚が刺激されることで、立ち現れると言えるだろう。

楠木について語る作法は、弘法大師や聖徳太子についてのものとほとんど大差はない。そうすると、1934年と35年の出来事は楠木正成に関わるものではあったものの、楠木正成でなければならない必然性などなかったと言えるかもしれない。

参考文献

- アミン（2008）「開かれた地域」空間・社会・地理思想 12（森正人訳）。
 河内長野市教育委員会（2002）『河内長野の近代建築』。
 森 正人（2007）「近代国民国家のイデオロギー装置と国民的偉人—楠木正成をめぐる明治期のふたつの出来事—」人文論叢 24。
 森 正人（2008）「1935年の楠木正成をめぐるいくつかの出来事—ナショナル・ローカル・資本—」人文論叢 25号。